

「山家さん！」  
と出て来た時の様子と云つたら、それは穏かならんなら、一寸と其處まで二人で買物に出掛けたと、然う云つて呉れと山家さんの頼み。而して断るのも聞かず、ずん／＼出掛けて行くぢやありませんか、仕方が無いのてとんだ處へ來合したものだ、心配して居りますうち、幸と山家さんが早く歸つて呉れて、虚言だけは吐かないで済みましたけれど、一足違ひに敏さんが歸つて來て、書齋へ行きましたか、

「山家さん！」  
と出て来た時の様子と云つたら、それは穏かならんなら、一寸と其處まで二人で買物に出掛けたと、然う云つて呉れと山家さんの頼み。而して断るのも聞かず、ずん／＼出掛けて行くぢやありませんか、仕方が無いのてとんだ處へ來合したものだ、心配して居りますうち、幸と山家さんが早く歸つて呉れて、虚言だけは吐かないで済みましたけれど、一足違ひに敏さんが歸つて來て、書齋へ行きましたか、

「サア、お千香さんは今麴町の何處に居るんです？」  
「敢て云ふの必要ありません、私はこれでお千香さんを監督の責任がありますからね。」  
「フ、ン、監督か、自分の監督も碌すつぽ出來ない癖に、よく云へた。」  
「何ですつて？」  
「流石に今度は山家さんも氣色ばんだ。」  
「良心に聞いて見れば好いつて事さ。」  
相手にはならんと云つた様子で、突然帽子を執つて出て行きました。山家さんの面色は淋しく、眼には異様の濕をさへ湛えたが、急に又氣を變へて、  
「ねえ、河田さん、ゆつくり遊んでつて頂戴な、今晚はお千香さんも居なくなつて淋しいんですもの……ね可いてせう、其代り澤山御馳走しますわ。」  
「え。」と答へて、私は俄かに夕暮の薄ら寒さを覚えるのでありました。

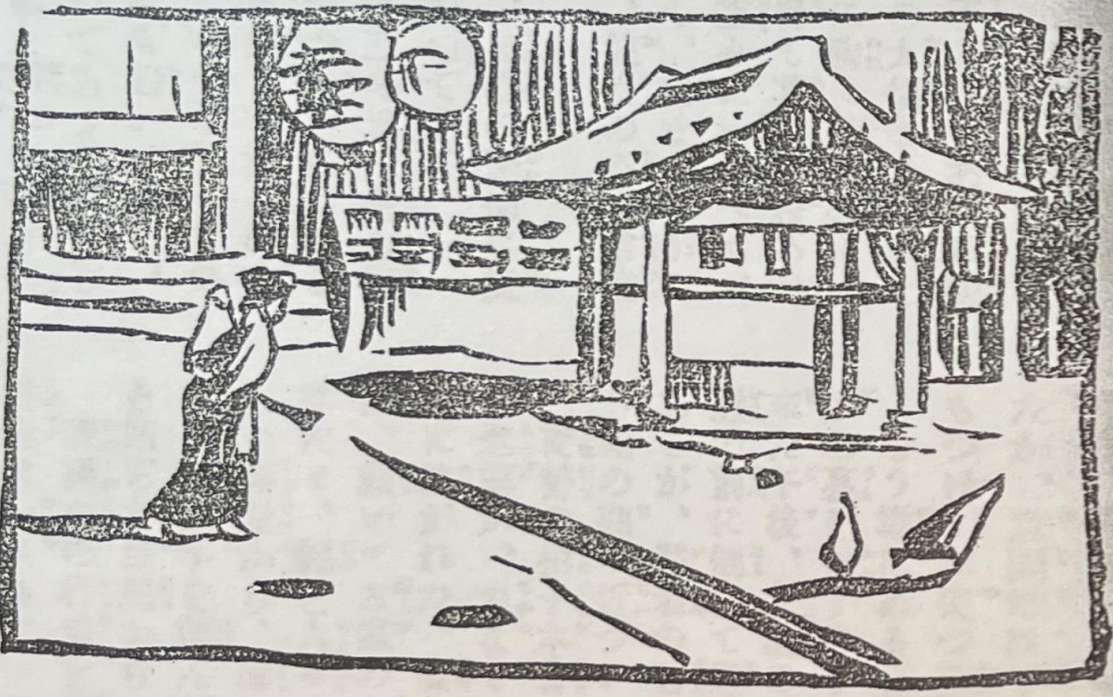
「地」  
死  
しやうと思つて讀んで居るうちに批評を忘れて「しやう」なのが眞の藝術品かも知れない、選者は何の理屈もなく、欣んで此作者に月桂冠を捧ぐ(評)

岩代 服部貞子

何家かの一番鶏が、夢のやうな聲を挙げたのにつれて、思ひ出したやうに、後の家の鶏も鳴いた。一枚だけ繰られてある雨戸の巾だけ、末稍々廣く庭に投げたあかるみに、敷石の下駄は寒むげにうつし出されて居る。一寸ばかり積つた雪に、二の字の跡入り亂れて續く母家には、物音もなく只鍋の影瓶の影臺所のみ灯が赤い。枕邊の人々は猶沈黙を續けて居る。白メリヤスの襟衣の袖口が赤く、顔の青い、鈍い目の、何處となく田舎染みだ、筒袖の若者は

(賞入)

子 豊 浦 杉



此家の養子で金次

我身を支ふるに苦心して居る。種々な小箱やうの物が



乗つて古びた箆笥の前に、鴉窠らしう座つて居るの  
は、菓子職人に嫁して居るといふ姪と其連れ合ひ。宵  
からの火氣や人いされに、無暗にせまい隠居所には、  
有明の寒氣も襲はず、洋燈の壺の油のみが著しく減つ  
て居る。

人々は猶沈黙を續けて居る。今一老婆の死を待ちつ  
つあつて、其死の聲の、如何な幽かなのをも聞き洩ら  
すまいとのやうに、期せずして人々の心は静寂をつく  
つた。十の眼は絶えず、注ぐともなしに堆高い蒲團の  
上に注がれて居る。色は黄ばんで頬骨徒らに高く、目  
はとぢたれば其底光りも憊はれぬ、半面暗い其顔の撮  
る人々の胸には、確かに哀愁の影が宿つた。けれども  
其死を悲しむのでは無い。といつてまた、老婆が従來  
の行爲——剛情な、苛酷な、其鋭い利刃に觸れた折々  
に、早く死ね！と願つて居た、其願が今叶はうとして  
居ても、それを喜ぶ心は更に起らうとはしなかつた。  
死んだ其後にこそ、今此枕邊に侍す人々は勿論老婆が  
過去の行爲を知る人々の多くは、何とはなしに重荷を  
下したやうな胸のすさを感ずるのであらうけれど。  
並木續きの町端に。馬競買場の廣地を前に展開二  
間間口のさゝやかな店を出して棚には、蠟燭、塵紙、

のも厭といふ程、嫌つてやまないのが常態であつた。

しかも一面に潜んで居る苛酷な性質は、それを罵り、  
苛んで、飽くことを知らなかつた。子を育てあぐる親  
親の苦心、優慮を知らぬ女は、彼れの大切なる財産を  
賭して、子とは恚んなものと、勝手に胸に鑄た型に、  
箆まる者を得やうとしたのである。得て其型に箆めや  
うとして、片手に捧げて居る財産の重みに比較べて、  
まづ其者のあまりに軽ろきに慄らなく、箆まらなかつ  
た其者を投げ出すに躊躇しないのが、彼女の心の常態  
であつた。

かくして老いた女は、世人の憎悪、良心の恐怖に反  
抗つて、益々意固地な老婆となつたのである。  
喘息で、連合ひに死別れてから恰度三年目、倉の家  
のおみな婆は、罰が當つて彼様になつたと、口さがな  
く言ひ傳へられた。それは或日俄に卒倒してから此方  
手足の自由を失つて、舌の廻りも思ふやうでなくなつ  
たからで。其時はそろ／＼今の養子にも飽いて来て、  
例の隠岐な眼光を研ぎかゝつて居たのであつたが、こ  
れ幸ひと本家の計ひで、遮に無に母家と離れた隠居所  
に押し込められてしまつたのであつた。月日の立つに  
従つて、彼女が心外で／＼堪らなかつた、憎い嫁の世

早附木の類を綺麗に並べ、柱には行田膏の看板見える  
瓦葺の低い家は、此地一體の木葉葺茅葺に對して、倉  
の家と町の人の稱つて居る、見かけによらぬ小金持  
である。子のない此家の妻女は、養子の面倒を見れない  
ので有名であつた。素生は會津藩の何とやらで、兎に  
角整然とした立居振舞に、會津訛りの抜けぬ言葉遣ひ  
切爐の灰に線目をたて、灰搔きはいつとも横座なる我  
前に置くもの、隙さへあれば茶箆箆や戸棚の拭き掃除  
と、それも自分でなくては氣に合はぬ性分。初め連合  
ひの甥の十歳ばかりになるのを育て、居たが、其子は  
年々に瘦せて来て、終には食物盗んで喰べるやうにな  
つたのを、人の善い夫は多くを言はないで、其儘實家  
に送り届けた。今度は困窮つて居た自身の姪を連れて  
来て、それでも足掛二年、何かにつけて苦い顔を向け  
て居たが、姪のお豊は出されるまでもなく、隣家の菓  
子職人と逃げてしまつた。

其後、出る者、出される者、それに池に入水つて死  
んだ一人を交せて、取り替へた養子は七人と數へられ  
た。いづれも初めの三月や半年は、珍らしさに、天か  
ら授かつた養子でゞもあるかのやうな待遇をするが、  
一年と起臥に馴れては、飽きやすい其性質は、顔見る

話を逃れて、大小便の始末は自分で出来るやうになつ  
たが、意固地は益々募つて、勝手から運ぶ煮物さへ箸  
もつけずに突つ返して居た。

もう雪はあるまいと心をゆるして居た日和續きに、  
手の裏を返すやうな今日の寒さ、白いものさへ飛んで  
來た午後、甘酒の鍋さげて隠居所を訪づれた嫁が、雪  
隠の前に倒れて居た老母を見付け出してかくの騒ぎで  
あるが、醫者の言を俟たず、集まつた人々は、いづれ  
も死の期の近づいたのを見て取つたのであつた。  
夜警の拍子木音牙を渡つた夜半、ふと昏睡から覺め  
た老婆が、力なく眸を開いた時、人々の顔は一樣に其  
方に注がれた。膝進ませて養子の金次郎が何やら言ふ  
た。續いて本家の主人も口を動かした。けれども老婆  
はたゞ、眠と人々の顔を眺めて居る。木札の未だ新ら  
しい藥壘から、薄紅の水を滴らして、其コップを口の  
邊に嫁が手を運んだ時、老婆が口は堅く結ばれて、つ  
と閉ぢた目尻から、白露ほろりと落ちて枕にしみた。  
我過去の行爲を反省みて、心から我死を哀悼ひ人の  
此世に一人もないのを思ひ知つた時、遺恨と、寂寥と  
の思ひが、油然として老婆が胸を襲ふたのである。  
死の前には誰しも正直である。其涙を惡意に解して



今更に老婆か悪むべき性行を思ひ起す人は一人もなかつた。懺悔——の涙と、恐らく人々はさう思ふて固唾を飲んだのである。絶え間ない水車の響が、一定の律をなして、哀音を調べて居る。怨恨なく、憎悪なく、たゞく巨大なる死の威の静寂に打たれて、未だ世のさびな断ち得ぬ犠牲者の前に人々の胸は首低れて居る。

我意にはびこるだけ、はびこつて世にも人にも突き放された老婆が死の前に俯首してゆく臨終の寂寞、少くも普通のお嬢様には書けない材料である。描寫も新式である、重みがある、少し説明に傾いたかも知れないけれど、非難するほどでもない。假に此作を中央文壇に出して、名前を隠して置いて、名ある人の作と見られるであらう地方に置くのは惜しい才だ。(評)

# 「人」

## 春雨の家

上野 葉山 村子

四月一日  
朝から雨は降るもの、仰いで顔に當るか當らぬか解らない位。晝近くなつてから白く糸の様にそぼそぼ

と降る雨の姿が見え始めた。私は何するともなく平常の癖で父の机に頬杖ついたまゝ、細目に開いた障子の隙間からしつと街を眺めて居る。お彼岸の折おいてにならうと仰被た伯父様が今日になつて來られた。それと間もなく來た父の友達杉田といふ五十近い男。次の間で三人が何か話して居る。何の人もあまり饒舌らない方なので話が途切れる。すると鐵瓶の湯のたぎる音さへ聞とれる。雨はしとしと、縁前の緋桃をたゞいて居るが手飼のカナリヤがひとときは囁つたあととは何の音もない。静かな日だ。這度日は妙に血液の循環のが鈍くなつたように至極平靜で殆ど無意識のようになる。私は何時にない超然とした氣持になつて時計が二時を打たけれど見上げて懺める。それさえ得せぬ無念無想とても言はうか。眼はたゞ向うの家の黒い板塀を傳ふ雨の線を迎へて兎もすれば目先に揺れる前髪の後毛を搔上げ様ともしなかつた。初こそ次の間の話も聞いたが今はたゞ何か話して居るなとばかり。それさへ何時か知らぬ位。傘をさして行く者。裾を端折て走る女。しつとりと、て婉かしいうちにも穩かな春雨の頃。早咲きの櫻は散り初める、空は曇つて居る。けれど、何處となく綠色

にうるむて居る。私は恍惚と眺めて居ると夢より夢に消えて行くやうな。私は不圖這麼事を考へた。『私は今誰人かに憧憬を慕ひ迷うて居るのぢやあるまいか』昔の人は物の哀れを知る年頃と言つた。虚榮心か何か追ひ詰られて向ふばかり始終見て居た時代の過たのちは——時の力は争はれない——自分の心に大なる間隙のあるのに氣がつくやうになつた。そして折々四邊を見まはしては曠野の中に獨立つような寂寞思ひがするさうな氣附て見るとその間隙を満たす何物かを求めずには居られない。男なら名譽や事業によつて求めようけれど女の身の悲しさ、諺にもある通り女は鳶のやうなもの、まといつてく者がなければ枯死して了う。私にはある人の歸を待のて。



川玉 (實入)

蛇の目傘をさした女が行く。高下駄の下男風の男が、せよく走る。元祿時代の春雨の町は這麼でしたらう私は果敢ない夢を追ふやうな氣がして妙に哀愁をおぼえて目をあげた。たえまなくうちはえて降る雨にぼんやりして遠方の山の頂や家の屋根や何やかや見ると皆霞むて居る。不圖表の通が賑やかになつた。それは學校が今退けたのである。一傘を二人でさして女の子がゆくと後から聲をかけた子があつた。二人は振りかへつて待つて居る。後の子は急いで追ひつめた。そして三人の二つの傘はならむて行く私は今日が新入學の日だと思ひ出した。

私が村の尋常を卒業して須川の高等へ新入學の時よ。丁度今日のやうな春雨がしつと降るので傘をかたげて新芽のふく並木道をゆく胸には臆氣ながら美しい希望の香を秘めて初て校門をくぐつた時の楽しい懐